

沖縄から東京へ：山之口獏再上京考（上）

松下，博文
筑紫女学園短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/9435>

出版情報：語文研究. 77, pp. 32-45, 1994-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



沖繩から東京へ

——山之口貌再上京考（上）——

松 下 博 文

I 本稿の目的

関東のメトロポリスとして機能していた「江戸」という都市が近代的中央集権国家体制の総合的機能を整えた新しい都市空間としてその国家的役割を背負って「東京」という名前に生まれ変わって以来、きわめて大量の人々が近代都市「東京」に憑かれたようになだれ込み、吸収され、吐き捨てられていった。

しかし、吐き捨てられ踏みにじられてもなお、国家の中心都市としての「東京」は私たちにとって非常に魅力的な空間であるらしい。山之口貌もまたかかる都市空間のもつ魔力に引きつけられ、はるか南海の孤島からまっすぐに「東京」をめざして故郷を飛び出してきた人間の一人だった。

本稿の目的は山之口貌のそうした故郷脱出のありようを残された記述に即して具体的に考察することにある。今回は再上京の具体的時期について考えたいと思う。

II うすぐもる記憶

知られるように、山之口貌は二度上京している。最初は大正十一年、二度目は大正十二年九月の関東大震災に遭遇し震災の罹災民として一時帰郷した後のことだ。だが、この二度目の上京の時期については自身の記憶のなかでもその時期は微妙に揺らいでいた。二つの文章を見てみよう（以下に使用する番号は本稿資料中の作品通し番号と一致する）。

⑩「酒友列伝」 上京したのは、大正十一年の秋なのであったが、徴兵検査前のことで、中学時代の友達は、すでに一流の酒飲みになっているのであった。そのころの東京では、カフェーの女給さん達も枯れすすきの歌や、さすらいの歌をうたっていた。（略）ぼくは、上京した翌年の九月一日の関東大震災が機会になって、一応、沖繩へ帰ることが出来た。ところが、途端に父の仕事が失敗して家を失ったり、恋愛に失敗したりで、云わば放浪生活の基礎が出来たのであ

〔資料〕

上京・再上京時期の記述に関する作品一覧

作 品 名	初 出 年 月 日 お よ び 掲 載 誌 紙	初 上 京	再 上 京	その他の関連記述
①「天国ビルの斎藤さん」	昭和14年1月号「中央公論」	×	×	在京16年間
②「無銭宿」	昭和25年2月号「新潮」	大正11年初秋	×	
③「野宿」	昭和25年9月号「群像」	○	9月なかば	
④「自作詩鑑賞」	昭和26年7月「中学生のための現代詩鑑賞」	大正11年	○	
⑤「琉球の幽霊」	昭和26年12月号「農林春秋」	×	×	在京30年近く
⑥「『金子光晴詩集』解説」	昭和27年3月『金子光晴詩集』	○	○	
⑦「祖国琉球」	昭和28年5月号「新潮」	大正11年	○	上京して30年
⑧「ある年の夏」	昭和28年7月号「明窓」	×	×	上京は大正の末
⑨「がじまるの木蔭」	昭和28年9月号「おきなわ」	×	×	出郷後30年
⑩「山原船」	昭和29年8月18日号「毎日グラフ」	×	×	上京して30年
⑪「暴風への郷愁」	昭和29年9月25日号「毎日新聞」	大正11年秋	×	
⑫「沖繩」	昭和29年11月11日号「日本経済新聞」	×	×	30余年前に上京
⑬「沖繩と日の丸」	昭和30年5月8日号「日曜新聞」	×	×	出郷後30年余り
⑭「現代詩講座選評」	昭和30年10月号～31年3月号「中学生生活」	×	○	
⑮「ふるさと沖繩を思う」	昭和30年11月号「女学生の友」	×	×	在京30年余り
⑯「兄の受験」	昭和31年3月8日号「産経時事」	大正11年秋	×	
⑰「酒友列伝」	昭和31年7月号「小説新潮」	大正11年秋	大正13年	
⑱「梯梧の花」	昭和31年7月3日号「読売新聞」	×	×	上京後30余年
⑲「沖繩の叫び」	昭和31年9月号「婦人画報」	×	×	出郷後30余年
⑳「沖繩悲歌」	昭和31年11月号「新潮」	×	×	出郷後30何年
㉑「黒美人小」	昭和32年1月号「新婦人」	○	×	
㉒「バランスを求めるために」	昭和32年2月『現代詩入門』	大正11年	○	
㉓「山羊料理」	昭和32年9月号「小説新潮」	×	×	30何年前には在京
㉔「自分の家に住む夢」	昭和32年10月25日号「東京新聞」	×	大正13年夏末	
㉕「ゴーヤの苦味」	昭和32年12月号「園芸 武蔵野」	×	×	35年ほど離郷
㉖「佐藤惣之助と私」	昭和33年7月2～3日号「沖繩タイムス」	大正11年	×	
㉗「餓別」	昭和33年10月28日号「毎日新聞」	×	×	35年も離郷
㉘「鹿児島雑感」	昭和33年11月8日号「南日本新聞」	○	○	35年ぶりに帰郷
㉙「ばくの半生記」	昭和33年11月25日～12月14日号「沖繩タイムス」	大正11年秋	大正13年秋	
㉚「沖繩帰郷始末記」	昭和34年2月27日号「産経新聞」	×	×	35年ぶりに帰郷
㉛「郷里沖繩への旅」	昭和34年5月12日号「新海新報」	×	×	30余年ぶり帰郷
㉜「沖繩はわが故郷」	昭和34年6月号「小学四年生」	×	大正14年	34年ぶりの故郷
㉝「沖繩の芸術地図」	昭和34年8月号「芸術新潮」	大正11年	大正14年秋	34年ぶりの故郷
㉞「泡盛談義」	昭和34年8月号「百味」	大正11年	×	
㉟「沖繩」	昭和34年9月号「世界の旅・日本の旅」	×	×	34年ぶりの帰省
㊱「失われた青春の風土」	昭和34年8月31日号「熊本日日新聞」	×	×	34年ぶりの帰郷
㊲「白・黒の精進あげ」	昭和35年1月号「大法輪」	×	×	34年ぶりの帰郷
㊳「政治の谷間、酒の谷間」	昭和35年6月25日号「産経新聞」	×	×	
㊴「チンブルー」	昭和35年8月号「俳句研究」	×	大正14年秋	34年ぶりの帰郷
㊵「沖繩は生きている」	昭和35年9月26日、28日号「沖繩タイムス」	×	×	34年ぶりの帰郷
㊶「小伝」	昭和35年11月『現代日本文詩集大系(7)』	大正11年秋	大正14年秋	
㊷「いまはわかしの夢」	昭和36年11月5日号「産経新聞」	×	×	34年ぶりの帰郷
㊸「行き当たりばったり」	昭和36年12月号「現代の目」	×	大正14年初秋	
㊹「矛盾の島沖繩」	昭和37年3月20日号「中部日本新聞」	×	×	34年ぶりの帰郷
㊺「寄り合い世帯の島」	昭和37年8月号「友愛」	×	×	34年ぶりの帰郷
㊻「沖繩よどこへ行く」	昭和37年9月号「政界往来」	×	大正14年	34年ぶりの帰郷
㊼「私の青年時代」	昭和38年4月号「社会人」	大正11年秋	大正14年秋	
㊽「消え去った婦人名」	昭和38年9月号「太陽」	×	×	34年ぶりの帰郷

(関連記述はあるが時日が明記されていないものには○、関連記述も時日も明記されていないものには×を付した)

る。(略)再度の上京は、大正十三年なのであった。泡盛を飲み飽きたわけでもなかったが、それっきり、沖繩へ帰る機会もなく東京で暮すようになってしまった。

⑦「私の青年時代」 大正十一年の秋に上京した。東京駅はたしか丸の内側の乗車口、降車口だけで、タクシーを見かけた覚えはなく、人力車が殆どなのであった。柳行李といっしょに人力車に乗り、早稲田の諏訪町にあった同郷の友人の下宿に落ち着いたが、この下宿を振り出しにぼくの放浪生活ははじまったのであった。(略)先輩の家と不義理を重ねて転々としているうちに大正十二年九月一日の大地震なのであった。(略)大震災を機に出直すつもりで罹災者として汽車、船を無賃で沖繩へ帰ったのである。(略)そして、十四年の秋、家出する友人があつて旅費を負担するからと頼まれ、かれと連れ立って再度上京したのであった。

資料に徴しても判断されるように山之口獏の最初の上京はおそらく大正十一年である。現存する文章を検証した限りにおいてもこの上京時期についての記述の不一致はいっさい見当たらず、また、罹災民として汽車や船を乗りつぎ沖繩に帰郷したはてに一家離散の憂き目に会いながらも、そこでの放浪生活を素材にしたおおくの短歌群も発見されているからだ。さらには、関東大震災という歴史的な大惨事に遭遇したこと、記憶がおよそ記憶違いであろう可能性はまず考えられないからだ。言いかえれば、山之口獏の最初の上京の記憶は少なくとも地獄絵のごとき関東大震災の強烈な記憶とともに鮮明に存在していたと見なしでもよい。

が、列記した二つの文章からも明らかなごとく再上京の時期についてのかれの記述は大正十三年と同十四年の間で微妙に揺らいでいる。いったいそれが真実なのか、あるいは、記憶のなかでなぜこの上京期のみがこのように揺らぐことになったのか。疑問に迫るためには再上京時の獏の生活の現場を改めて確認し直しておく必要があるであろう。

III うすぐもる生活

大震災のために不通になっていた東海道線の復旧により山之口獏は鹿児島経由で沖繩にたどりついた。しかし、那覇の実家に帰りつくと実家はすぐにも他人に手渡さなければならぬ状態だった。那覇の第四百四十七銀行を退職した後、八重山の産業銀行の支店長の椅子にすわっていた父が銀行に大量に札束を運んでくる地元の鯉節業者に目を奪われ鯉節製造業に欲を出しそれに失敗して多額の負債を背負ったためである。

そして大正十二年の冬、一家没落の憂き目を見ながら獏は母と中学二年の弟と女学校一年の妹と、父の住む八重山へと渡って行った。八重山でかれが見た風景は水平線のかなたに双眼鏡を向け、むなしく海辺に立ちつくしている父重珍の姿と毎日毎日手ぶらで帰ってくる重珍丸の船影だった。さらには、悲劇は獏の身辺にも迫っていた。負債の手形として親類の者から自身の身柄を拘束されそうになったのである。仕事は炭焼小屋で働くことだった。山之口獏が再度の上京を決意したのはまさにこうしたときである。再び、二度と沖繩の土を踏むまいと決心し、かれは八重山脱出をたくらみ、ほう

ほうの程で那覇に舞いもどることを企図したのである(③「野宿」参照)。以下に示す短歌には山之口獺の当時の暗澹たる心境がきわめてストレートに詠われていると断じてよい。

- ・山暗み灰色の雲ひくう垂れて心おもたき八重山の旅
- ・鯉節製造人の色黒き群れに交れる日のさびしさかな
- ・借金の催促者なりき顔高く空を仰ぎぬ唾吐きてゆく
- ・ふるさともなき心地なり我が性をさびしめ給へ故里の友

大正十三年七月二十一日号「八重山新報」に一挙掲載された三十二首のうちの四首。獺はおそらくこれらの作品群を八重山に置き去りにすることにより、八重山に決別し、父母に決別し、兄弟に決別し、さらに、現在の自身の境遇にも決別せんとした。そして少なくとも作品群が掲載される直前の七月中のある時期に八重山を脱出したに違いない。つとに仲程昌徳氏も指摘しているごとく、一家の置かれていた状況から判断した場合、掲載された作品群は《八重山にいながらにして発表するには多くのさしさわりが生じてくるものであった》という事態が予想されるからだ。かくして山之口獺は以後の生活の方向性を完全に決定づけることになる放浪生活の第一歩を自身が生い立ちしかもすでに実家を失ってしまった那覇の街に刻することになる。

那覇に逆もどりしてきた獺には野宿生活が待っていた。昔の友人知人を訪ねまわったあげく、それらの人々にもしだいに敬遠され、結局、行き場を失い、郊外の奥武山公園に泊まったり、波の上海岸の芝生に寝転んだり、空腹の一時しのぎに松葉をかじって見たたり、

まさに散々たるルンペン生活がかれの那覇生活のすべてを覆ってきた。そうした折、中学時代の親友だった質屋の次男坊である《亀重君》が、東京までの道案内を交換条件に上京旅費の負担を申し込んできたのである。⁽²⁾ 獺の二度目の沖縄脱出はこうして成功することになる(③「野宿」参照)。が、しかし、その後昭和三十三年に異国となった米軍統治下の沖縄に帰るまでただの一度も山之口獺は自覚的に家郷の土を踏もうとはしていない。

なぜこうも長い間、かれは故郷に帰ろうとしなかったのか。帰るべき具体的故郷をすでに喪失していたからだと裁断するのはおよそ見当はずれの判断に違いない。獺はおそらく、帰郷→一家離散→八重山行き→身柄の拘束→八重山脱出→放浪生活という一連の不如意な生活体験とともに、一家をかかる状況に陥れてしまった沖縄の土地を生涯呪うべき呪詛の土地としてかれの記憶のなから意図的に葬り去ってしまったかかったのではないか。第一詩集『思弁の苑』に見られるある特徴的な現象はこうした推論にひとつのヒントを与えてくれるように思われる。

『思弁の苑』には、知られるように、《沖縄》《琉球》という語彙がまったく使用されてはいない。記念すべき第一詩集に自身の出自を明らかにするこのような語彙が一度たりとも使用されていない事実をいったい私たちはどのように受けとめればいいのか。

IV うすぎたない郷愁

詩集中のこうした事実注目しそれに言及した評家はおそらく仲程昌徳氏が最初だが、たとえばこのような事実に対して氏は「婦人

公論」の昭和七年六月号に発表された久志富佐子の「滅びゆく琉球女の手記」や、これ以外の琉球人差別の文献を幅広く援用しながら詩集の全的構造における〈沖繩〉〈琉球〉という語彙の欠落を『社会生活』の中で出自をはっきりと言えない状態、いわばそういう内外共に身動きのつかない状態が、『思弁の苑』の中にみられる貌と沖繩との関係で生じた状態であったわけであるが、それが、貌に沖繩を積極的に語らせることをはばんだ大きな理由であった、と云えるのはなかるうか」と意味づけようとした。さらに、出郷以来のルンペン生活によりおよそ家族に顔向けできぬ自身の不如意な境遇をも重ねてここに考察して見ようと試みた。⁽³⁾

要するに、沖繩が過去に受けてきた民族的人種差別の背景と出郷者として出世コースからはずれ家族にも顔向けできない己の不如意な現実生活とがこうした特殊語彙の欠落に明らかに投影されているのではないか、というのが氏の最終的な結論であろう。

おそらくそのとおりである。そしてこの見解の延長線上に立って多少自論を展開するなら詩集における〈沖繩〉〈琉球〉という語彙の欠落はもう少し純粹に個人的な側面から具体的に強調されてもよいようにも思える。

つまり、記念すべき第一詩集に〈沖繩〉〈琉球〉という語彙を貌が敢えて使用しなかった最も大きな理由は、私見では、おそらく一家離散の生誕の地への個人的な嫌悪乃至は意図的な故郷忌避の念に端を発していたと見なしてよいようにも思われるのだ。たとえば、『沖繩』〈琉球〉という言葉が見られないかわりに『思弁の苑』には以下のごとき表現がその反面で見受けられるからだ。

(a) 港からはらばひのぼる夕暮をながめてゐる夜鳥ども／椽側に腰をおろしてゐて／軒端を見あげながら守宮の鳴声に微笑する阿呆ども／(略)／酒にぬれてはうすびかりする唇に見とれ合つてゐる家畜ども／僕は、僕の生れ国を徘徊してゐたのか／身のまわりのうすぎたない郷愁を振りはらひながら／動物園の出口にさしかゝつてゐる

——「動物園」

(b) 噛つた／父を噛つた／人々を噛つた／友人達を噛つた／親友を噛つた／親友が絶交する／友人達が面会の拒絶をする／人々が見えなくなる／父はとほくぼんやり坐つてゐるんだらう／街の聲の彼方／うすぐもる旅愁をながめ／枯草にねそべつて／僕は／人情の歯ざわりを反芻する

——「喰人種」

(c) 頭のむかふには、晴天だと言ってやりたいほど無茶に、曇天のやうな郷愁がある／あつちの方でも今頃は／瘦せたり煙草を喫つたり咳をしたりして、父も忙がしからうとおもふのである／妹だつてもう年頃だらう／をこのことなど忙がしいおもひをしてゐるだらう

——「賑やかな生活である」

傍線部に注目して見よう。故郷の輪郭が不鮮明で汚れていることに気づく筈だ。へうすぎたない郷愁」といい、へうすぐもる旅愁」といい、曇天のやうな郷愁」という。すべては灰色の色調でうす暗く塗り込められていると言つてもよい。

明らかに(a)は再上京時の手になるものである。〈動物園〉とはいつたい何か。沖繩そのものであらう。山之口貌はそしてその故郷の

人々を〈夜鳥ども〉〈阿呆ども〉〈家畜ども〉と表現した。指示表現としてこれほど人々を見下した嫌悪表現もないのではないか。故郷に生きる人々は、畢竟、狡猾で貪欲で無知で臭くて、あたかも動物園にいる動物のごとき存在なのだ。文中の言葉を使用して説明するなら〈うすぎたない〉存在なのである。

ここに私たちは、故郷を恨み、嫌悪し、呪い、そしてそこに息づく人々を真正面から否定せんとする一人の故郷否定者の姿をはっきりと確認することができるに違いない。

それに対して(b)(c)にはこうした直截的な嫌悪表現は見られない。少なくとも、自身の位置する環境を認識しつつ家族の安否さえ気遣うゆるやかなノスタルジアがここでは優先されているからだ。しかしながら、故郷のイメージは依然として不鮮明なままではあろう。『思弁の苑』でとらえられた故郷とはおよそこうしたものであった。

述べてきたごとく、山之口獏は少なくとも故郷を好意の眼差して見めてはいない。再上京時の沖縄での不幸な生活体験がその根幹にあることはもはや異論もないであろう。記念すべき第一詩集に〈沖縄〉〈琉球〉という語彙をかれが敢えて使用しなかった最も大きな理由もおそらくこうした個人的な体験にあったと判断してもよい。

獏は故郷を意識的に灰色のかなたへ押しやろうとしていた。結局、記憶のなかで再上京の時期が微妙に揺らぐことになったのもここにこそその原拠があったと思われるのである。

V 大正十三年秋再上京への疑問

中心に入って行こう。大正十三年と同十四年のいずれが再上京の正確な時期なのか。季節を手がかりに考えてみよう。獏の記憶によれば再上京の季節は〈夏末〉から〈秋〉のことであるらしい(資料参照)。具体的には〈九月なかば〉のようだが、この記憶をひとつの指標にした場合、およそ以下の問題が派生してくる。

Ⅲ章で推定したごとく山之口獏の八重山脱出はおそらく大正十三年七月のことである。しかし、かりに七月に那覇に舞いもどってきたとして、わずか二ヵ月後にはたして東京への脱出が可能なのかどうか。つまり、〈九月なかば〉の時点で上京可能な経済状況、すなわち旅費を中心とするその他の費用を獏が所有し得ていたのかどうかという実質的な問題に突き当たることになる。

逆もどりの後の那覇での放浪生活を描いた文章から判断する限り、獏は上京費用を捻出するためにとりたてて労働に従事しているようにも思われない。前に見たようにたしかに「野宿」では、一応、中学時代の親友だった〈亀重君〉が東京まで誘導してもらったことを交換条件にその上京費用を負担したことにはなっている。かかる現場を考慮するなら〈九月なかば〉の上京はおよそ可能なことには違いない。だがしかし、この場面にしても与えられた文章を読む限り、〈亀重君〉の出現までには相当の時日を要しているように思われる。改めてこの部分を読み直してみよう。

(d) 那覇の家は、すでに人手に渡ってしまったのであるし、那覇に

ある親類という親類のごとくが、父の債鬼でないものはなかったし、いきなり、るんぺん生活へと、ぼくはその第一歩を踏み入れるより外はなかったのである。ぼくは、友人知人を訪ね廻った。

そのうちに、世間から敬遠されるようになって来て、しまいに波の上海岸の芝生で夜を明かしたり、港のまんなかの奥の山公園に寝泊りをするようになったり、いつのまにやら、松葉などかじったりして空腹をまぎらわしたりするようなことが出来るようになったのである。そんな時、中学時代の親しい友人であった亀重君というのが現われて、殊勝な相談をばくに持ちかけて来た。東京まで連れてってもらえないかというのである。

——「野宿」

「自作詩鑑賞」「祖国琉球」「ぼくの半生記」「行き当りばったり」「私の青年時代」にも等質の内容は描かれているが、文章の流れに即して考えれば少なくとも《亀重君》との出会いは友人知人や那覇の郊外を相当に放浪した末のことであつたように私には判断される。むろん、こうした遍歴を短時日のこととしてとらえてもいいのだが、獏が佐藤春夫に語ったという佐藤の手になる以下のごとき文章はこうした可能性をおよそ否定するに足る必要な要件を備えているように思えるのだ。

(e) そのうちにさつきお話した中学時代の友人で、親切にしてくれた男の叔父さんで県庁に勤めてゐた人が、県の産業雑誌の表紙を描いて見ないか、金をいくらかやうといつてくれたのでまづい表紙図案を描きました。——といふのも父の破産前に二年ほど東京へ出て、或る私立の画学校にゐた事があつたのを、この人が思ひ出して

くれたのでせう。私の今度の上京の目的も、はじめはもう一度その学校へ行くつもりで来たのでした。それでへんな表紙図案に、八円だったかいくらかのお金を払つてくれました。それが落むと図書館に臨時雇の口があるが、君は図書館の連中とは知り合ひだからといふので今度は図書館に十日ほど使つて貰ふことになりました。これも皆友人が私の旅費を心配してこしらへてくれた仕事に違ひないことは、僕にもよくわかつてゐるのです。いつまでもぐづぐづしてゐては土地で評判が悪くなるばかりだから早く出京させてやうといふ心づかひであつたのでせう。ほんの短時日の僅かな仕事がつちり東京までの汽車賃、船賃、雑費に足りるほどあつた時に、この真意が解つて本当に有難く思ひました。——この金がなかつたらですか。それは上京出来なかつたでせうね。

——昭和八年一月作「放浪三昧」

引用部は那覇を放浪し友人知人を訪問し、無視され疎外されたという内容に後接する部分。周囲の好意により上京の途に着く経緯を語る一節だが、どうやら事実は文章のとおりであるらしい。最近刊行された宮里一夫『「ウチナー」見果てぬ夢——宮里栄輝とその時代——』（平成六年一月ポーターインク社）によれば獏はしばしば上京當時宮里栄輝のつとめていた首里の県立図書館に出入りしていたようである。

宮里栄輝は獏より五歳年長の県立一中の先輩。一中卒業後に上京しその後熊本の高高に入学するが一高を受験し直すために同校を中退、しかし一高入学の夢はついで大正十三年五月に伊波普猷が館長をしていた県立図書館に司書としてつとめることになる。家もな

く那覇の街をさすらっていた当時の貌は暇つぶしに再三ここに入
りしていたのだが、貌と宮里はこのときに接近したらしく貌と「琉
球歌人連盟」を設立し、生涯の友人であった国吉眞哲はこうした二
人の交友を同書で△その頃の貌は図書館にもよく通っており、文雄
とのこともあって、二人が親しかったのは間違いない。時には『サ
ンルー、今日は酒を飲みに行こう』と気安く声をかけ、辻に誘うよ
うな関係であったと思う▽とのべている。

国吉のいう〈文雄〉とは館長伊波普猷の甥の伊波文雄のこと。放
浪時にさまざまに迷惑をかけながら一面貌自身あまり好感を持っ
てはいなかった貌の友人だが交友のこうした好悪は今ほ置くとして
「放浪三昧」に書かれた図書館の〈臨時雇の口〉は宮里栄輝や伊波
文雄との親しい交友関係をとおしておそらく貌の手中にもたらされ
たものであろう。

要するに、(d)(e)の文章や宮里栄輝との関係等を視野に入れながら
これらの内容を突き合わせれば、記述の細かい異同は問わぬとして
八重山脱出↓那覇到着↓ルンペン生活↓友人からの敬遠↓放浪生活
↓周囲の好意による臨時収入↓沖縄脱出という複雑な再上京の経緯
があざやかに再構成できることになる。たとえば、臨時収入による旅
費の工面がかりに(e)に見られるように短時日に行なわれたとして
も、およそ以上のごとき複雑な上京過程を二ヵ月内外のこととして
許容する判断を私は持たない。短期間の出来事にしては語られてい
る内容があまりにもめまぐるしく起伏の激しいもののようにも思わ
れるからだ。へいつまでもぐづぐづしてゐては土地で評判が悪くな
るばかりだ」という後半の表現はまさにこうした判断を反面見事に
傍証してくれる表現ではないか。さらなる問題を示して見よう。じ

つは「ばくの半生記」には以下の文章も挿入されていた。

(f) 震災でばくが帰郷する直前であったが、東京で「じょ情詩」と
いう詩専門の雑誌にばくは投稿したことがある。(略)震災の罹災民
としてばくが沖縄にかえるとき、当選を確信しつつ、富士見町のポ
ストにその詩稿を投函した。「日向のスケッチ」「昼は空っぽである」
「夜は妊娠である」という三篇の詩である。それが発表されたのは
ばくが沖縄に帰ってからのことであつた。

「じょ情詩」に上記の作品が掲載されたのは大正十四年八月のこ
と。この事実をひとつの根拠にした場合、傍線部から判断して少な
くとも山之口貌は上記の作品群を沖縄の地で再上京する前に見てい
たのではないかという予想が成り立つように思える。つまり、大正
十四年八月の時点ではかれはまだ沖縄に滞留していたということ
だ。⁽⁸⁾

むろん傍線部は、作品掲載の時期が自身が沖縄に帰ってからのこ
とを示すもので大正十三年秋に上京したとしてもたしかにその掲載
は〈沖縄に帰ってからのこと〉には違いない。それゆえ傍線部を「掲
載された作品を沖縄に帰っているときに見た」という都合のよいコ
ンテキストにすりかえてとらえるのはきわめて危険なことかもしれ
ぬ。しかし、このテキストにはこうした読みを可能にする十分な幅
が存在すると見なしてよい。

そして、かりにこう予想した場合、私たちは八重山脱出↓那覇放
浪↓沖縄脱出というあのめまぐるしい生活の現場をある程度納得し
たかたちで理解できるに違いない。大正十三年七月に八重山を抜け

出し翌十四年の〈九月なかば〉に上京するまでの一年間をたしかに那覇で生活していたという再上京期の空白を非常にゆるやかな時間の枠組みのなかでとらえることが可能になるからだ。

(d)(e)(f)の文章を検証する限り、大正十三年秋に再上京したという山之口貌の記憶は結局貌の記憶違いではないかという結論に到達することになる。

VI 昭和三十三年という年

改めて「ぼくの半生記」に注目しよう。この自伝にこそまさしく大正十四年再上京説を証明してくれる最大のカギが隠されているからだ。昭和三十三年十一月六日、山之口貌は三十数年ぶりに帰郷する。「ぼくの半生記」はこの帰郷時に書き上げられた文章だが、じつはこの自伝を境域にして帰京後に発表された「沖繩はわが故郷」(29)以後、再上京の時期がすべて大正十四年に統一されることになる(資料参照)。こうした変化は何に起因するのか。少なくとも解答は帰郷それ自体のなかに求められるべきであろう。

思うに、帰郷とはいわば私たちを過去という失われた時空へ一時的にいざなう一種の転送装置であろう。言いかえれば、貌の三十数年ぶりの帰郷はさながら自身の失われた青春を追認する恰好の機会だったということだが、およそそのときの帰郷体験が再上京期の正確な記憶をあざやかに甦らせる大きな契機になったことは間違いない。さまざまな帰郷体験を通過しながら貌は自身の記憶をより確かなものにして行ったということだ。そしてそうした通過体験のなかから自身の再度の上京が従来信じていた大正十三年ではなく、翌十

四年のことであったことを確認する何かしらの根拠を獲得して行ったのではないか(ただ、「ぼくの半生記」執筆時にはその時期を確信するには至っていなかった。貌が確信してその時期を発表するのは帰京後の昭和三十四年六月の時点である)。

帰郷時に書き上げられた文章(それも自伝的文章)を分水嶺にして再上京時期の表記が見事に訂正されてゆく過程には少なくともそうした何らかの決定的な内的要因が存在していなければならぬまい。沖繩に滞在した二ヵ月の間、知られるように山之口貌は親族の住む八重山に渡ったり、あるいは那覇でおおくの友人知人たちと旧交をあたためたりした。およそそうした体験をとおしてかれは再上京の時期を再度確認し直して行ったと見てよい。

たとえば、筆者の追跡調査では帰郷時に末吉安久・阿波根直成・国吉眞哲・豊平良顕・新屋敷幸繁・伊集盛吉・竹内和三郎・船越義彰・池田和・大城立裕・嘉陽安男・大湾雅常・太田良博・田中久夫・牧港篤三らの旧友や地元の新進の作家たちと接触していることが判明しているし、あるいは中城公園で戦禍をくぐりぬけてきた親族たちと再上京以来の再会をはたしていることも明らかにしている(別稿予定)。

29 「鹿児島雑感」 ぼくはこれまで五回鹿児島に来た。来たといっても、鹿児島に来る目的で来たものではなかった。一回目のときは沖繩から上京のため鹿児島で汽車に乗らなければならなかった。まもなく東京で、関東大震災にあい、罹災民として沖繩に帰る途中、鹿児島から船に乗ったのであるが、そのときが二回目である。三回目は再度上京したときで、やはり鹿児島から汽車に乗るためな

のであった。(略)さていつもながら、こんどもついでみたいであるが実は三十五年ぶりで、沖繩に帰る途中鹿児島に寄ったわけである。

③⑨「沖繩帰郷始末記」三十五年ぶりで郷里に帰り、ついこのごろになって帰京した。沖繩での滞在期間一カ月に限られているところの岸信介大臣の証明する身分証明を懐にして行ったのであるが、沖繩へ行ってみると、色々の事情が次から次へとできて、さらに現地での滞在を一カ月のばしてもらって満二カ月を過ぎ、往復とともに一カ月半ほどで東京に舞い戻ったわけである。

③⑩「沖繩の芸術地図」大正十四年の秋、二度目の上京をして、それ以来一度も郷里の沖繩へ帰ったことはなかったが、去年は三十四年ぶりに沖繩を見ることが出来た。十月の末頃東京を発ったのであるが、大阪と鹿児島で道草を食ったので、那覇に着いたのは十一月の六日で、今年の一月の五日までの二カ月を沖繩に滞在した。行くときは那覇丸で昼すぎに鹿児島を出て、翌日の昼頃那覇に着いた。帰りは白山丸で午後の四時頃那覇を出て、三晩船で過し、四日目の朝大阪についたのである。

帰郷前後に書かれた文章を列記した。「産経新聞」昭和三十四年二月二十七日号に発表された「沖繩帰郷始末記」に注目したい。貌はおよそこの時点まで再上京の時期を大正十三年であると信じていた。(三十五年ぶり)から(三十四年ぶり)へと表記が移行してゆく。ちょうどその中間にこの文章は位置しているからだ(傍線部参照)。

つまり、「沖繩はわが故郷」で再度の上京を同十四年と確信するに至る一步手前に「沖繩帰郷始末記」は位置しているということだが、しかし、いかなる経緯によりその時期を確信するに至ったのかその明らかな根拠を今ここに示すことはきわめて困難である(帰郷したという事実がそうした確信に繋がったということのみを今は指摘できるだけだ)。ただ、帰京後に書かれた帰郷始末記を通覧する限り、以前にくらべて記述内容が鋭く詳細になってきている事実には留意していいであろう(「沖繩の芸術地図」参照)。すなわち、この時期の文章は体験記に特徴的に見られる事実の記録性に重点が置かれているということである。

たとえば、再上京時を起点にして離郷の年限を(三十五年) (三十四年)と年単位で表記し始めるのは帰郷を一年後にひかえた②⑤の文章が最初だが、この文章以前はきわめて大まかに(三十余年) (⑫⑬⑭⑮)、(三十年余り) (⑬⑭)、(三十何年) (⑳㉑)とのみ記されていた。だが、こうした記述が帰郷前後になると(三十五年) (三十四年)のごとく著しく年単位で記録されるようになる現象はまさにその好例であると言ってよいであろう。

こうした事実は帰郷時をはさんで貌の意識がいわば「記憶」を正確に洗い出しつつ「記録」しようとする事実重視の方向へ向かっているという明らかな証拠であろう。要するに、大正十四年という再上京の期日がいわゆるこうした「記憶の洗い出し」により正確に算出された年であるということになる。

検証してきたように、おそらく山之口貌の再上京の時期は大正十四年であろう。「野宿」「放浪三昧」「ぼくの半生記」、あるいは「八重山新報」に発表された短歌群の存在は見事にそのことを立証して

くれたに違いない。とりわけ、帰郷時に書かれた「ぼくの半生記」には大正十四年再上京説を強固に補強する決定的な内的要因があった。帰郷を契機に自身の記憶を改めて洗い出してゆく作業がこの文章には見られるからだ。そしてその結果、この文章を境にして再上京時期の表記が大正十四年に確実に移行しているからだ。帰郷とは損われてしまった記憶を鮮明に再生してくれる記憶再生装置であろう。すなわち山之口貌はこの装置により自身の再上京の時期をおよそ〈三十四年ぶり〉に手中にし得たのである。

VII まとめ

大正十四年に沖繩を出てから昭和三十三年に帰郷するまで山之口貌はただの一度も故郷に帰ることはなかった。その間、日本は戦争に負け沖繩は米軍の支配下に編入された。米軍支配下の沖繩の風景を見たとき貌の胸中はどうであったか。極度に変貌してしまった家郷の風景におそらく茫然としたに違いない。

詩人の黒田三郎に人手に渡った生家をしばらくぶりに訪ねたときの感懷を書きつけた「故郷喪失者」(「都市」昭和四十五年五月)という文章がある。

〈都市計画のため、墓地まで全くなくなり、新しい山腹に新しい墓が建っていた。そのとき、僕はもう他人の眼でしか見ることでしかない故郷というものを考えざるを得なかった。僕の知っている故郷のイメージはもはやなかった〉。

おそらく黒田三郎はようやくこのとき自身の「ふるさと」を手に入れることができたと言っている。つまり、失うことにより初めて

故郷は獲得されるものである。言いかえれば、観念的であれ現実的であれ生まれた土地を出てしまわぬ限りその人にとってその地は「ふるさと」にはなり得ないということだ。故郷に住んでいる人々にとり「ふるさと」など存在はしない。故郷を離れ異郷をさまよっている人々にのみ「ふるさと」は存在するのだ。

〈私は蒼空を見た。蒼空は私に沁みた。私は瑠璃色の波に噓ぶ。私は青色の中を泳いだ〉と書かれた坂口安吾の「ふるさと」に寄する讃歌(「小説」昭和七年七月)もじつはこうしたコンテクストのなかにその命脈を保持している文章の一つであろう。

何を失うことを故郷の喪失というのだろうか。記憶のなかに息づいていた「風景」の喪失もおよそ故郷喪失の一例であるに違いない。おそらく黒田三郎のさきの文章はその代表的な例と言ってもいいであろう。山之口貌の場合、故郷の「風景」は蘇鉄であり竜舌蘭でありガシュマルでありデイゴであった。山原船であり崇元寺であり守礼門であり波上であった。要するに、これらは生まれ育った那覇の「風景」である。

おおくの評者は貌を語るとき「琉球」をいい、「沖繩」をいう。だが、実際の山之口貌の「風景」は「ナーフア」にこそ存在する筈ではないのか。しばしばかれが「ナーフア」について語り、そして饒舌になるのは那覇こそがかれの青春の悲喜劇の表舞台だったからに他ならない。山之口貌は、見てきたように、山原船が往来するこの「ナーフア」の港から大正十四年の秋に二度と故郷に逆もどりせぬことを決意してまっすぐに「東京」をめざして飛び出して行ったのである。

従来、再上京の時期は大正十三年であると見なされてきた。既刊

の研究書やその他の関係文献に付された「年譜」を一覧する限りは、大正十三年と判断されている。しかしながら残されている文章に表記の揺れが存在している以上、一方的にそれを決定づけることは慎まなければならない。こうした考えのもと検証してきたのが本稿だが、結果として大正十三年再上京説を覆すことになった。いまだ従来の「年譜」にはおおくの事実誤認が点在する。その誤りを正してゆく作業も今後の課題ではあろう。

ただここではこうした誤認を正すことを所期の目的にはしていない。大正十四年に再上京したという事実の上にさらに大きな展開を想定しているからだ。朔太郎との関係がそれである。この問題は「大正十四年秋」という時日が存在せぬ限りおよそ展開不可能な問題であろう。次稿ではこの点について考察して見ようと思う。

注

(1) 仲程昌徳「山之口貌の短歌」(『国文学論集』昭和58年2月)『沖繩近代詩史研究』昭和61年4月新泉社再録)

(2) 旅費についてはおおくの友人からの厚意も寄せられたようだ。たとえば親友のひとりであった国吉眞哲は貌の上京に際して「アルバイトで得た五円を銭別に贈った」という。平成四年三月に刊行された『国吉眞哲歌集「ゲリラ」(おおみち出版社)に付けられた「年譜」を参照されたい。ただしこの「年譜」では貌の上京を大正十五年のこととしている。

(3) 仲程昌徳「山之口貌 詩とその軌跡」(昭和50年9月法政大学出版局刊)

(4) たとえば、大正十四年七月に刊行された本山桂川『南島情趣』(聚英閣)に付けられた「鹿児島・沖縄航路 大阪商船会社定期線発着時刻及運

賃表」によれば、那覇―鹿児島間の大正十四年の運賃は一等二十五円、二等十六円、三等八円五十銭である。

(5) 〔未来の芸術家を夢みれば夢みるほど、気は、上京をあせったのであるが、勤いて、旅費をつくる能もなく、ぼくは、ただ、夢ばかりを追っていたのかも知れない。親しい友達には、どれもこれも、絵かきの卵であったり、小説家の卵であったり、詩人の卵でもあったり、歌人の卵でもあったりしたので、ぼくは、その日その日の都合で、行き当りばつたり、かれらを訪ね廻っては、絵のはなし、小説のはなし、詩や歌のはなしをした挙句、そこに泊めてもらったり、食わしてもらったりしていたのである。しかしながら、世間はぼくの都合ばかりで、おもいうようなものではなかった。(略)ぼくは、すっかり、世間から見放されてしまつて、どこを歩いても、うしろ指を差され、爪弾きをされるような身分になつてしまい、世間の狭さ、街の狭さを感じないではいられなかったのである。そのうちに、機会あって、念願の夢を抱いて、ぼくは、再度の上京を実現することができたのであった〕(自作詩鑑賞)、〔ぼくは、再度の上京を企てて、八重山を逃げ出し、那覇に戻ってきたが、住む家もないので、しまいには、たびたび野宿をするようになった。ある夜のこと、辻町の遊廓に迷い込んで、とある店先の縁でひとやすみしているつもりのあるところを、そのままここに寝てしまったのである。揺り起こされて、気がつく、眼の前にひとりの遊女が立っていた。そんところにとこに寝ていては、風邪をひくから彼女のところに来いというのである。(略)その頃を最後に、ぼくは再度の上京をしたのであった〕(『祖国琉球』)、〔ぼくは世間から敬遠されて来たのである。どこへ行っても、居留守をつかわれたりした。その頃のある日、石川ジルーの家にいき、「ジルー、ジルー」と呼ぶと、アンマリの声がして「ジルーやおらんむん」というのである。かえろうとする、居ないはずのジルーの声がして「おしが、おしが」(おるよ、おるよ)というのである。振りかえってみると、ジルーが首をのびして苦笑しているのである。ぼくは、しまいには、奥武山公園や波之上に

行って、青空の下で寝たり起きたりしたこともあった」(「ぼくの半生記」)、「郷里の沖繩にばくはいられなくなって、再び上京したのが大正十四年の初秋のことだった。ばくは家庭の事情から郷里にいたころすでに放浪生活に陥り、住所不定の身で知人友人、親類などを食いつめての挙句の果ての上京なのであった」(「行き当りばったり」)、「へぼくは人質にならないうちにと石垣島を逃げ出して那覇に出たがそこではすでに住むところもないばかりか、友人知人のところを転々とするより外にはなく、とどのつまり海岸や公園に寝泊りするようになったのであった」(「私の青年時代」)等の文章を読む限り、貌は上京まで那覇の街で相当の日数を費やしているとも見てもよい。

(6) 伊波文雄との交友関係については「酒友列伝」「沖繩の芸術地図」「ぼくの半生記」「佐藤惣之助と私」等を参照されたい。

(7) 仲程昌徳『抒情詩』への投稿詩(「潮流詩派」昭和52年4月号)『近代沖繩文学の展開』昭和56年1月21書房再録)を参照されたい。ここには実際の掲載作品が「哀—ニヒリストへの贈物」も加えて計四篇であることが報告されている。

(8) 筆者は平成五年七月二十一日から八月二日まで計七回にわたって「琉球新報」に「山之口貌の青春」と題して貌の再上京が大正十四年であるとして推定する小文を書いた。その後、この小文を補強展開するかたちで仲程昌徳氏が九月六、七日の同紙上に「山之口貌の上京—貌詩のスタイルの成立をめぐる」と題する文章を発表されたが、九月六日の文章のなかで、氏は(f)に引用した箇所についてこのように述べている。貌の二度目の上京は、実際何年であったのだろうか。実は、貌自身、それが、何年であったかを決定するようなことを「ぼくの半生記」のなかで書いていたのである。「ぼくの半生記」は先に触れたように、二度目の上京を「大正十三年」としていたが、そのことが間違っていることを示す出来事を、貌は、そのすぐ前に書いていた。その出来事とは「震災の罹災民としてぼくが沖繩にかえるとき、当選を確信しつつ、富士見町のポストにその詩稿を投函した。『日向のスケッチ』

『昼は空っぱである』『夜は奸嫉である』という三篇の詩である。それが発表されたのはぼくが沖繩に帰ってからのことであつた」というのである。貌が、投稿したのは四篇であつた。そこにも貌の記憶違いを見ることができることからして「それが発表されたのはぼくが沖繩に帰ってからのことであつた」という回想も疑わしいということになる。もはや手のうちようもないが、貌が「当選を確信」して投稿した雑誌は『抒情詩』、貌の詩が掲載されたそれは第十四第八輯で、大正十四年八月一日に発行されたものであつた。貌が、大正十三年の秋に上京していたのなら、当然その雑誌を沖繩で見ているわけではない。貌に二度目の上京をうながした契機の一端は、大正十四年八月一日に発行されたその雑誌を見たことにもよっているように、(「大正十四年」説を間違いないものとするこれ以上の証拠はないと言えよう。筆者はこの見解を受け継いでいるが、ただ、(f)の文章に絶対の『証拠』を置いているとはいえない。筆者の立場は(f)の文章を大正十四年説を補強するひとつの傍証ととるに過ぎない。

(9) 当時沖繩タイムス社に勤めていた豊平良顕の証言によれば「ぼくの半生記」は口述筆記であるという。以下の文章を参照されたい。へあえて自叙伝執筆を、しつこく推めた。こういう機会でなければ、貌さんは一生自分の自叙伝を書く機会を失うのではないかと思つたからだ。最初は頭を横に振って聞かなかつた。沖繩タイムスに大田良博という記者がいたが、この記者はすぐれた作家で文章力もある。私が信頼しているから貌さんの口述を大田君に筆記させて、大田君の書き上げた原稿を貌さん自身の文章に加筆訂正して自叙伝にしたと提案、これも乗り気ではなかつたが、しかし貌さんと大田君と私の三人が、十分打ち合わせた結果、貌さんもついに納得、数日間、社の一室に貌さんと大田君をカンヅメにして、みごとな自叙伝が出来上がって、当時芸芸欄に十数回にわたって連載された。貌さんの口述そのものが、貌さんの文体とほとんど同じ語り口で、それを大田君が忠実に筆記し、あとでわずかな修正加筆で仕上がったと聞いている(「豊平良顕」バクさん

の周辺」昭和44年2月「新沖縄文学」。

(10) ただ、この文章以前にも資料に見られるように〈在京十六年〉(①)「天国ビルの斎藤さん」参照)という表現や、資料に収録されていないが、「声をあげて泣く」(昭和二十九年十二月二十七日号「東京新聞」というエッセイにも〈沖縄を出てから十六年目ぐらいのこと〉(第一詩集『思弁の苑』出版まで)という表現も見える。この場合、いずれも大正十三年を起点にした年数の換算である。